

<取扱注意>

保護林 区分		署等名	保護林名称	面積	設定年	設置目的	調査結果の概要	検討委員会における評価	(参考)局の実施予定等
林 木 遺 伝 資 源 保 存 林	26	日高南部	北海道キタゴヨウ26	9.93	H3	キタゴヨウの群生地を保存し、主要林業樹種としての林木遺伝資源とする。	いずれのプロットとも、キタゴヨウの優占率は高い。本数率20～50%、胸高断面積合計50～80%を占める。一方、キタゴヨウの稚樹はあまり確認できなかった。高木層は20mに達し、キタゴヨウが優占するほかトドマツが混生。亜高木層もキタゴヨウが優占する中トドマツ、コシアブラ、ハウチワカエデ等が見られた。林床はスズタケが優占度5で繁茂し、草本層ではその他ヤママミジ、ハウチワカエデ等も見られた。シカの足跡有。		当該林分は急峻な尾根部に位置し、稚樹が少なくともキタゴヨウが他種にニッチを奪われることは想定し難いと考えられ、天然更新により維持可能であると考えられる。
	27	日高南部	北海道コナラ24	10.00	H3	コナラの群生地を保存し、主要林業樹種としての林木遺伝資源とする。	いずれのプロットとも、コナラの優占率は高い。本数率約30%、胸高断面積合計50%以上を占める。高木層は20mに達し、コナラのほかミズナラも比較的多く見られた。コナラは直径65cmも個体もあり。亜高木層はヤママミジ、アカシデ等が、低木層はアカシデ、イタヤカエデ等が見られる。林床はミヤコザサが優占度5でみられており、その他ミズナラの稚樹も見られた。一方、コナラの稚樹は確認できなかった。		亜高木層、低木層を備えた健全なコナラ林であると考えられる。
	28	日高南部	北海道ミズナラ27	21.62	H3	ミズナラ群生地を保存し、主要林業樹種としての林木遺伝資源とする。	いずれのプロットとも、ミズナラ以外の他樹種の混交度合いは高い。立木本数に占めるミズナラの割合は10%を下回り、胸高断面積合計では30～50%を占める。高木層は20m。高木層、亜高木層ともにトドマツ、エゾマツ、シナノキ、コシアブラ、ハリギリ、ミズナラ等の多樹種がみられ、その中でミズナラは散在しており少ない。林床はクマイザサが優占度5で繁茂しており、エゾマツ、トドマツの稚樹も見られた。一方、ミズナラの稚樹はあまり確認できなかった。シカの足跡有。		シカの痕跡があることから更新は困難であると考えられる。当面は自然の推移に委ねたい。
	29	檜山	函館サウグルミ8	5.50	S63	福島地区に群生するサウグルミを保存し、主要林業樹種としての林木遺伝資源とする。	サウグルミは、プロット2では本数比率51.5%と優先していたが、プロット1では21.1%程度であり、ブナ、トドマツの占める割合が高い。高木層は27m。高木層、亜高木層はサウグルミが優占するほか、一部ブナ、トドマツやその他広葉樹が混生。低木層では、カエデ類やブナが見られた。草本層は、クマイザサが散生するなか、シダ類が見られた。サウグルミの低木や稚樹は、両プロットも確認できなかった。		早急な対応が必要な状況とは言えないが、自然条件下での母樹下における稚樹の発生は期待できないことから、将来に向けて人工下種更新の検討も視野に入れていきたい。
	30	檜山	函館シナノキ、イタヤカエデ、ミズナラ、アオダモ9	11.60	S63	大成地区に群生するシナノキ等を保存し、主要林業樹種としての林木遺伝資源とする。	いずれのプロットともブナ、ミズナラが優占していた。胸高断面積で見ると、ブナは40～50%強の値であった。ミズナラは次いで多く、14～30%強であった。ブナの大径木、ミズナラ、ハリギリ、イタヤカエデ等の大中小径木等の多種から構成される多段林。高木層は18m。高木層、亜高木層ではブナが優占しその他ミズナラ、ホオノキ、イタヤカエデ等が見られた。低木層でも、ブナ、ミズナラ、カエデ類がみられた。草本層は、チシマザサが群生しているが、ササの少ないところにヒメアオキ、ハイイヌガヤ等の常緑性の植物が見られた。		保存対象種の平均胸高直径は概ね30cm以下であり、健全な状態であると思われる。
	31	檜山	函館ヒノキアスナロ12	18.50	S63	厚沢部地区に群生するヒノキアスナロを保存し、主要林業樹種としての林木遺伝資源とする。	2つの調査プロットとも、ヒノキアスナロが優占していた。胸高断面積合計で8割以上の値であった。ヒノキアスナロの純林に近い。高木層は20m、ヒノキアスナロが優占し、一部ホオノキ、ハリギリ等混生する。亜高木層、低木層は未発達。一部ヒノキアスナロ、ハクウンボク、コシアブラ、ブナ、ミズナラ等確認された。草本層では、ヒノキアスナロの稚樹のほか、ブナ、ミズナラ、カエデ類等の稚樹や、チゴユリ、タチツボスミレ等も見られた。亜高木層のヒノキアスナロに立ち枯れも見られた。		ヒノキアスナロの更新が確認されており、天然更新により遺伝資源保存林として維持可能であると思われる。
	32	檜山	函館ミズナラ、クリ、カツラ、ハリギリ、トチノキ、トドマツ7	31.85	S63	厚沢部地区に群生するミズナラ等を保存し、主要林業樹種としての林木遺伝資源とする。	針広多様な樹種が見られた。胸高断面積合計では、ミズナラ、トドマツ、ヒノキアスナロが優占していた。高木層は27m、ブナ、ミズナラ、トチノキ、ハリギリ等広葉樹とトドマツ、ヒノキアスナロ等針葉樹の混交して見られている。亜高木層、低木層においてもカエデ類も含め針広混交して見られている。草本層は、クマイザサが群生しているが、ササが薄いところでは、トドマツ、ヒノキアスナロの稚樹が多く見られたほか、ブナ、ミズナラ、カエデ類の稚樹やハイイヌガヤ、ツルシキミ、オオバクロモジ等も見られた。		面積的にある程度の規模の攪乱が起こりうる広がり有するため、クリ・トチノキは動物散布、カツラ・ハリギリは風散布に期待し、天然更新により遺伝資源保存林として維持可能であると思われる。
	33	渡島	函館ウダイカンバ5	10.74	S62	八雲地区に群生するウダイカンバを保存し、主要林業樹種としての林木遺伝資源とする。	2つの調査プロットとも、ウダイカンバ、ダケカンバが優占していた。ウダイカンバは、胸高断面積合計で約20～50%の値であった。林床ではクマイザサが密に成育しており、高木層と草本層(クマイザサ)とで構成される林分。プロット2では、ウダイカンバの高木本数は比較的多いが、大径木化しており、立ち枯れ木も見られた。ウダイカンバの稚樹はみられなかった。高木層は18m、ウダイカンバ、ダケカンバが優占する。草本層では、クマイザサが優占度5で繁茂し、フッキソウ、エゾノヨツバムグラ等が一部見られた。		稚樹が見られないのは、先駆種であることに加え、厚いクマイザサに林床を覆われているためと考えられることから、ササ刈り、地表処理等を検討していきたい。